

作曲家の系譜



清瀬保二（きよせ やすじ、1900年1月13日 - 1981年9月14日）は、大分県生まれの作曲家。

大分にゆかりの作曲家、また分かる範囲で作詞家についても、語ってみよう。

舞台上立つ再現芸術家と違い作曲家や作詞家は、創った歌が広がることで楽譜とともに長く伝えられる点が異なっている。

そんな分野でも、大分県からは有能な人材が出ているが、まず思い浮かぶのは作曲家の清瀬保二である。今の宇佐市（当時は宇佐郡四日市町）で1900年（明治33年）に生まれ、81歳で没している。清瀬の作曲のジャンルは極めて広く、管弦楽曲、室内楽曲、合唱曲、ピアノ曲、歌曲から童謡にまで及んでいる。作曲した詩には北原白秋、西条八十、三木露風などの名前も見えるが、中でも石川啄木の詩による歌曲集は有名だ。

校歌の作曲も母校の宇佐中学を始めとして、30校を超える。また映画音楽にも積極的に取り組み、1942年から1959年までに32曲に達している。

生まれたのは、滝廉太郎が弱冠21歳でドイツ留学に旅立つ1年前のことだった。家庭は父親が貴族院議員を務めるような裕福な家庭で、西洋音楽に興味を持つようになる環境の中で育ったようだ。

音楽評論家の小宮多美江が執筆した伝記によれば、中学校を卒業して進んだのが瀬

戸内海を挟んだ愛媛県松山市に新設された松山高校であった。この頃にはすでにヴァイオリンを弾くようになっており、松山の楽器店でベートーヴェン作曲のメヌエットと云う小曲の楽譜を手に入れて、その短い曲中に内蔵された楽想の暗さと深さに心底から揺り動かされたとある。小宮氏はこの楽譜の出所についても、四国にあった第一次世界大戦の捕虜収容所にいたドイツ兵の置き土産ではないかと述べている。彼らが徳島で日本最初のベートーヴェンの『第九交響曲』を演奏したのが1918年であり、清瀬の通った松山高校の近くにも収容所があったからである。

そして、彼はベートーヴェンの曲によって、彼自身の中にあつた音楽に対する情熱があふれ、高校を中退して東京に向かったのである。

前述の伝記で序文を書いた佐藤敏直は、「師も持たず、留学もせず、独学と云う最も手のかかる道を選んだ清瀬の関心は、本人の言によれば、芸術の根源、文化の礎をなす人間性であり、国の違いを超えた強さにあつた」と述べている。彼の作曲した曲が、極めて広範囲のジャンルをカバーしていることから、この彼の考えが、深い意味を持つ

ことが理解される。

一方、作詞家ということになると、まず取り上げるとすれば、『早春賦』を作詞した吉丸一昌だろう。歌詞は格調を保ちながら、春の情景を見事に描ききっている。

―春は名のみの風の寒さや／谷の鶯歌は思えど／時にあらずと声も立てず／時にあらずと声も立てず―

作曲は中田昭であり、モーツアルトの『春へのあこがれ』とよく似た曲想といわれているが、日本の歌百選に選ばれている。

吉丸は白杵市の出身で、1889年に大分中学（現在の県立大分上野丘高等学校）を卒業して、熊本第五高等学校に進み、1902年に東京帝国大学国文科を卒業した。東京府立第三中学校教諭、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）教授を務めた。

五高時代には教授に夏目漱石や小泉八雲、後に東京音楽学校の校長に就任する湯原元一がおり、東京の第三中学では教え子に芥川龍之介がいた。湯原校長の誘いで東京音楽学校に転じ、国語と作歌の教授として、後に発行される文部省発行の尋常小唱歌の作詞委員会の委員長となった。

このような経歴から吉丸は唱歌の成立や

その後の日本の童謡などに多大な影響を与えている。その中に今も魅力を失わない『早春賦』があつたのだ。

童謡では竹田市出身の佐藤義美が大中原作曲の『犬のおまわりさん』の作詞をしている。この曲は2007年の日本の歌100選にも選ばれた。佐藤は他にも数多くの童謡を作曲しており、全集も6巻に及び、1975年（昭和50年）に第5回赤い鳥文学賞を受賞している。

最近の情報も忘れてはならない。NHKを中心にテレビの番組で様々な音楽を作曲している若き女性がいる。阿南亮子がその人で、大分県立芸術文化短大を卒業後、作曲の道に進み、NHKの番組「昨夜のカレー、明日のパン」をはじめとして映画では、2014年に公開された「百瀬、こっちを向いて」などの音楽を担当した。



中山欽吾 なかやまきんご

iichiko 総合文化センター 館長
（公財）大分県文化スポーツ振興財団理事
大分県立芸術文化短期大学理事長兼学長
（公財）東京二期会理事長